# 朝日 歌壇 俳壇

〈アオモジV〉　日高理恵子

## 永田和宏選

デコピンにまんまと一杯食わされた国がどよめく結婚発表　（寝屋川市）今西　富幸

大谷の義母になる夢砕け散る四年に一度の如月閏日　（横浜市）臼井　慶子

結婚も号外が出る地元紙の伊達の殿様しのぐ大谷　（川崎市）宇藤　順子

百歳を迎えし村山富市の両の眉毛の長さと白さ　（観音寺市）篠原　俊則

こそばゆし目標などと言われつつデイサービスの最高齢は　（我孫子市）松村　幸一

書斎の戸開ければいつも「どうした？」と振り向く夫よ椅子に声あり　（富津市）松村　君代

胸の奥ずんと突き刺す二人の名年賀はがきに並びてあれば　（小平市）篠原美奈子

☆竹釘を口にくわえて桧皮打つロボットにできぬ職人の技　（石川県）瀧上　裕幸

幾時間SLIMは待ったことだろう月の地平に昇る朝日を　（青森市）佐野　橙子

方円の器に水は従ひぬ妻の器にわれは従ふ　（東京都）庭野　治男

【評】暗いニュースばかりにうんざりしていたが、大谷結婚の報に世界は驚いた。冒頭三首、どれも愉快。義母になれなかった臼井さんは残念だったが。篠原さん、百歳まで生きたら私の眉も村山さんくらいにはなりそう。松村さんも白寿。

## 馬場あき子選

逃げ切ったつもりで逝きし犯人の残るポスターつくづく眺む　（下関市）内田　恒生

三月の雪に驚くパンプスが気をつけて歩く私以上に　（富山市）松田　梨子

☆竹釘を口にくわえて桧皮打つロボットにできぬ職人の技　（石川県）瀧上　裕幸

再婚す一度嫌ひになった人縫ひを戻して満作の花　（長野市）中沢　義壽

ハルキウの地下鉄の駅空見えぬ教室があり児ら学びいる　（観音寺市）篠原　俊則

ひと握りの人にて語られ決められる命を奪ふ兵器の輸出　（長井市）大竹紀美恵

事務方と呼ばれる人が生息す永田町一丁目一番地　（寝屋川市）今西　富幸

四歳が「お子様ランチもう嫌だよ」パパとおんなじ鰻が食べたい　（東京都）唐木よし子

駅前で托鉢に立つその前にカフェでからだを温めてをりぬ　（三鷹市）宮野隆一郎

島に診療所が一つ医師三人二千余人の命を守る　（東京都）三輪　裕子

【評】第一首は一九七五年、連続企業爆破事件の容疑者として全国手配された桐島聡のうら若い写真にその後の半世紀を思う感慨。第二首はパンプスの思いと私の関わりが面白い。第三首は竹釘で桧皮を打つ。まさに高度な職人技である。

## 佐佐木幸綱選

珍しく魚屋に見る生海鼠佐渡の海より今朝来たという　（長岡市）柳村　光寛

開き戸をそっと開ければお見舞のツルウメモドキを持ちて立つ人　（豊川市）宇佐美幸枝

家々の戸を開け放ち吊し雛はなやぐ伊豆の稲取の春　（東京都）上田　国博

熱冷めたように減りたる報道に反比例するガザの苦しみ　（つくば市）山瀬佳代子

徴兵を避けるがために祖国捨つ若きらに酷し　（札幌市）川合　優子

船いまだ車線塞ぎて横たはる二艘の間を交互に抜ける　（羽咋市）北野みや子

☆ゆれながらワルツを歌う合唱団いいな素敵だ人の声って　（富山市）松田　わこ

ヌートリアこが害獣知らずして土手の青草のどかに食める　（広島市）金田　美羽

一つずつ色の増えゆく春の庭ランドセル二つ出番を待てり　（高知県）原　真由美

声優をやってみたくて申し込む夢はみるもの追うなと息子　（名古屋市）さとうりえ

【評】第一首、魚屋の店頭に取材。ナマコの歌は珍しいが取れたてのナマのナマコの歌は初めて見た。第二首、お見舞いに来た人のクローズアップの仕方が独特。第三首、何軒もの家で「吊し雛」を通行する人に開放しているのだろう。

## 高野公彦選

「脚はもうないのに足が痛む」と言うベッドの上のウクライナ兵　（観音寺市）篠原　俊則

ちりめんじゃこの中に小さな蛸がいて同じ地球に私もいます　（川崎市）八嶋智津子

「珠洲の塩使っています」とメモのあるバゲット一本トレーにのせる（相模原市）平野野里子

年ごとに流氷薄くなる羅臼いつか消えるかクリオネ、あざらし　（東京都）椿　泰文

グラノラを一口三十回噛んで言いたきことと一緒に飲み込む　（奈良市）山添　聖子

☆ゆれながらワルツを歌う合唱団いいな素敵だ人の声って　（富山市）松田　わこ

ゆっくりとこの風邪回復するらしくおかゆがあまし白寿の舌に　（我孫子市）松村　幸一

子のいない私にとって介護とは子育てのよう七年目に入る　（中津市）荒谷　みほ

長きこと介護施設に勤務する友が語りぬ「人はせつない」　（横浜市）滝　妙子

終活の最中にひょいと顔出せりお世話になった赤尾の豆単　（加東市）藤原　明

【評】一首目、戦火で失った手や足に痛みを感じることを「幻肢痛」という。戦争の悲劇の象徴のようなもの。井上ひさしの戯曲「きらめく星座」にこの幻肢痛のことが出てくる。二首目、地球に棲む生物の多様性を思わせつつユーモアのある歌。

## 俳句時評　日々の味わい

阪西　敦子

俳人協会賞を受賞した句集『家族』（ふらんす堂）は千葉皓史の32年ぶりの第二句集。俳人協会新人賞を受賞した前作『郊外』（花神社）の後から、平成末年までの340句が収められている。

新人賞の受賞後、「俳句とは全く別の一身上の都合」で石田勝彦、綾部仁喜に師事した俳誌「泉」を退会、その後は細々と作句を続けたという。そのことがこの三十余年の隔たりを生む一方で、句集にゆったりした時間の流れをもたらしている。〈**春の虹こつんとものの置かれたる**〉で見えるのは、ものを置くほどの音さえ響く春の虹の明るい静けさ。〈大揺**れのものおもてを蟻の道**〉では、風も葉の揺れもものともしない蟻の歩みを驚きとともに描く。〈**消しまはりたる春灯点けまはり**〉には、何か忙しくそれもうれしい春の浮きたちが宿る。

句集の中でたびたび現れるのが母だ。〈**いちにちを母老いたまふ春の雨**〉での、春の雨のひと日の中で老いを兆していく母の姿、〈**母の家に母ゐる秋の簾かな**〉での、秋になお残る簾の内にあるゆっくりと進む母の時間、〈**雪解風そのとき母を失ひぬ**〉では、春へ向かう季節のうつろいの中での忽然とした喪失を描く。一句によって日常の中にある時間を言い留めるような句群の中で、折々に見える母への視線がわずかに時代の変遷を表す。

過ぎゆく日々の味わいを、丹念に句とすることで、改めて見える姿がある。繰り返しのようで二度とはない慈しむべき時間に満たされた一冊だ。（俳人）

◇次回から俳人の岸本尚毅さんが担当します。

**歌壇でネット投稿を始めます**　4月1日から歌壇への投稿がインターネットからもできるようになります。朝日IDの登録（無料）が必要です。ネット投稿は1回の投稿につき1首、1週間に2首（投稿2回）以内。投稿や詳しい規定は短歌投稿フォーム（http://t.asahi.com/wno4、またはQRコードから）をご覧下さい。はがきの投稿規定は従来通りです。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があ